室内オーケストラシリーズ23

# PROGRAM

## ベートーヴェン:ロマンス 第2番 ヘ長調 op.50（約9分）

*Ludwig van Beethoven: Romance No.2 in F major, op.50*

## モーツァルト:ヴァイオリンとヴィオラのための協奏交響曲

変ホ長調 K.364(320d)（約30分）★

*Wolfgang Amadeus Mozart: Sinfonia Concertante in E flat major for violin and viola, K.364(320d)*

第1楽章　アレグロ・マエストーソ *Allegro maestoso*

第2楽章　アンダンテ *Andante*

第3楽章　プレスト *Presto*

── 休　憩（20分）── Intermission

## モーツァルト:交響曲 第41番 ハ長調 K.551「ジュピター」（約31分）

*Wolfgang Amadeus Mozart: Symphony No.41 in C major, K.551, "Jupiter"*

第1楽章　アレグロ・ヴィヴァーチェ *Allegro vivace*

第2楽章　アンダンテ・カンタービレ *Andante cantabile*

第3楽章　メヌエット:アレグレット *Menuetto: Allegretto*

第4楽章　モルト・アレグロ *Molto allegro*

---

ヴァイオリン：フォルクハルト・シュトイデ *Volkhard Steude, Violin*

ヴィオラ：山碕 智子 *Tomoko Yamazaki, Viola*（★演奏曲）

管弦楽：兵庫芸術文化センター管弦楽団 *Hyogo Performing Arts Center Orchestra*

---

**2020 1/10（金）3:00PM開演（開場2:30PM）**

**兵庫県立芸術文化センター 神戸女学院小ホール**

主催：兵庫県、兵庫県立芸術文化センター

※演奏時間は目安となります。前後する可能性がありますので予めご了承ください。



# これさえ見ればわかる! 今回の聴きどころ

飯尾 洋一（音楽ライター）

## 名手が本場ウィーンの香りを伝える

世界最高峰のオーケストラ、ウィーン・フィルのコンサートマスター、フォルクハルト・シュトイデがPACチェンバー・オーケストラで共演する。プログラムはベートーヴェンとモーツァルトの傑作。ウィーン古典派のエッセンスを伝える。

シュトイデはソリストとして、またコンサートマスターとして、この日の主役を務める。名器ストラディヴァリウスから紡ぎだされる艶やかな音色と、流麗で歌心にあふれるソロは聴きもの。本場ウィーンの名手が若いPACメンバーとどんなアンサンブルを築くのかも楽しみだ。

## 必聴POINT　ライターおすすめ!!

**モーツァルト:ヴァイオリンとヴィオラのための協奏交響曲** 変ホ長調 K.364(320d)

ふたりのソリストが対等な活躍をくりひろげる二重協奏曲。ヴァイオリンとヴィオラ、そして管弦楽とのかけあいが、くらくらするような高揚感を生み出す。はつらつとした両端楽章と愁いを帯びた第2楽章のコントラストは鮮やか。

## PROFILE

### フォルクハルト・シュトイデ［ヴァイオリン］

ベルリン・ハンス・アイスラー音楽大学で学ぶ。93年グスタフ・マーラー・ユーゲント管の第1コンサートマスター就任。94年ベルリンでディプローム取得後、ウィーンにてアルフレート・シュタール教授に師事。

94年ウィーン国立歌劇場管のコンサートマスターに弱冠23歳で就任。2000年からウィーン・フィルハーモニーのコンサートマスターも務める他、シノーポリやバレンボイム等の指揮でソリストとしても共演。ヨーロッパと日本にてソロ活動を多数展開。

02年からウィーン・ヴィルトゥオーゼンのコンサートマスターを務める他、シュトイデ弦楽四重奏団を結成。

1718年製のアントニウス・ストラディヴァリウス（ヴィオッティ、ロゼラがかつて所有）で、オーストリア国立銀行より貸与。

### 山碕 智子［ヴィオラ］

相愛大学、シュトゥットガルト音楽大学に学ぶ。

大阪センチュリー響初代首席ヴィオラ奏者に相愛大学卒業と同時に就任し『ウォルトン:ヴィオラ協奏曲』をソリストとして演奏。現在はロータス・カルテットのヴィオリストとして、さらに単独でも欧州各地で多忙な演奏活動を行っており、南西ドイツ・フィルのソロ・ヴィオリスト等も歴任。

2019年12月には日本センチュリー響創立30周年記念定期公演に招かれて『バルトーク:ヴィオラ協奏曲』を共演。多くの聴衆・音楽関係者より賞賛された。

# PROGRAM NOTE

曲目解説――
演奏をより深く楽しむために

飯尾 洋一（音楽ライター）

## ベートーヴェン：ロマンス第2番 ヘ長調 op.50

初演：おそらく1798年

### 歌うように奏でられるのびやかなメロディ

ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン（1770～1827）といえば、まっさきに連想するのが交響曲をはじめとする重厚でシリアスな作品群。ところが、このロマンス第2番でベートーヴェンが見せるのは、ロマンティストとしての顔。あのベートーヴェンがこんなに甘美な楽曲を書いていたことに驚かずにはいられない。作曲は1798年の秋。当時、まだベートーヴェンは一曲も交響曲を完成していない。ブレイク直前の20代の若き野心家の姿がここに。

曲名の「ロマンス」とは、一般に抒情的でロマンティックな性格を持った器楽曲や歌曲を指す言葉。「アダージョ・カンタービレ」（ゆったりと歌うように）と指示された独奏ヴァイオリンが、のびやかで息の長いメロディを奏で、これにオーケストラが応える。

**楽器編成** 独奏ヴァイオリン、フルート、オーボエ2、バスーン2、ホルン2、弦楽5部

**作曲家プロフィール** ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン（1770-1827）
*Ludwig van Beethoven*

ドイツに生まれウィーンで活躍した作曲家。ハイドン、モーツァルトに続いて古典派様式を受け継ぎながらも、さまざまな革新をもたらして後世の作曲家に巨大な影響を及ぼした。とりわけ9曲の交響曲は西洋音楽史における金字塔として名高い。音楽における主観性を明確に打ち出し、ドラマティックで雄大な個人様式を確立。耳疾により聴力を喪失するもこれを克服し、ヒロイズムや精神的崇高さを音楽によって表現した。





## モーツァルト：ヴァイオリンとヴィオラのための協奏交響曲 変ホ長調 K.364(320d)

初演：不明

### 主役はどっち!? ふたりのソリストのための協奏曲

協奏曲とも交響曲ともつかない曲名だが、ここでの協奏交響曲とは複数のソリストがいる協奏曲を指していると考えればいいだろう。作曲時期は1779年。23歳のヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト（1756～1791）は、パリからザルツブルクに帰った際に、パリで大流行していた協奏交響曲というスタイルを故郷にも紹介しようと考えて、この曲を書いた。

ソリストはヴァイオリンとヴィオラのふたり。通常であれば、ヴァイオリンが主、ヴィオラが従の関係になりそうなものだが、ふたりは対等な関係で名人芸を競い合う。スコア上では、他のパートがフラット3つの変ホ長調で書かれているのに、独奏ヴィオラだけはシャープふたつのニ長調で記譜されている。一見すると奇妙だが、ヴィオラは通常よりも半音高く調弦して演奏するように求められており、実際に鳴る音はほかの楽器ときちんと調和するようになっている。なぜこんな仕掛けがあるのかといえば、おそらく、ヴィオラからより明るく輝かしい音を引き出して、ヴァイオリンと渡りあえるようにしているから。モーツァルトはピアノはもちろんのこと、ヴァイオリンもヴィオラも巧みに弾いた。ということは、このヴィオラ・パートはモーツァルト本人が弾くためのものだったのかも……と考えられるのだが、曲の初演に関する資料は残っていない。

ふたりのソリストの活躍に加え、オーケストラ・パートは雄大でシンフォニック。ザルツブルク時代に書かれた作品としては、異例なほどの充実度を誇る傑作である。

**第1楽章** アレグロ・マエストーソ
浮きたつような高揚感にあふれた快活なアレグロ。作曲者自身によるカデンツァ（ソリストが技巧を披露する即興的部分）が用意される。

**第2楽章** アンダンテ
一転して沈痛なムードが支配する。陰影豊かな絶美の音楽。カデンツァあり。作曲時期から、パリ旅行中に亡くなった母親への思いが反映されているのではないかと想像する人も少なくない。

**第3楽章** プレスト
はしゃぎまわるような活発なフィナーレ。陽気なおしゃべりが芸術へと昇華されるかのよう。

**楽器編成** 独奏ヴァイオリン、独奏ヴィオラ、オーボエ2、ホルン2、弦楽5部

## モーツァルト：交響曲 第41番 ハ長調 K.551「ジュピター」

初演：不明

# 主神の名で呼ばれる、天才のラスト・シンフォニー

「ジュピター」という曲の愛称は、モーツァルト自身が付けたものではない。有力な興行主ヨハン・ペーター・ザロモンがローマ神話の主神にちなんでこう呼んだものが広まって、早くから定着した。

作曲は1788年、モーツァルト32歳の年。35歳で早世した作曲家にとって、30代はすでに晩年といえる。これがモーツァルトの最後の交響曲となった。同時期に作曲された交響曲第39番変ホ長調および交響曲第40番ト短調と合わせて「三大交響曲」と呼ばれることがあるが、これらはいずれもなんのために作曲され、どういった機会に演奏されたのか（あるいはされなかったのか）、わかっていない。ここまで充実した作品を書く以上は、なんらかの収入のあてがあったはず。三大交響曲をセットにして出版するためなのか、連続演奏会を開催するためなのか……。諸説あるが、いずれも定説には至っていない。

**第1楽章** アレグロ・ヴィヴァーチェ

序奏なしで重々しい主題で開始され、作品の荘厳な性格を予告する。

**第2楽章** アンダンテ・カンタービレ

憧憬に満ちた緩徐楽章。しかし歌うような音楽というよりは、どこか漂泊するような趣も。

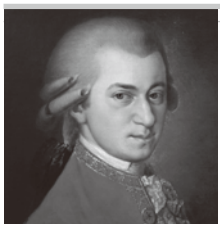
**第3楽章** メヌエット：アレグレット

流れ落ちるかのような主題による典雅な舞踊の音楽。

**第4楽章** モルト・アレグロ

冒頭に登場する、いわゆるジュピター音型（ド―レ―ファ―ミ）をもとに、複数の声部を緻密に絡み合わせながら、終結部の壮麗なフーガへと向かう。

**楽器編成** フルート1、オーボエ2、バスーン2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦楽5部



**作曲家プロフィール** ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト（1756-1791）*Wolfgang Amadeus Mozart*

オーストリアのザルツブルクに生まれ、後にウィーンに渡った作曲家。父レオポルトにより幼少時から才能を見出され、神童としてヨーロッパにその名をとどろかせた。10代より目覚ましい創作活動を続け、オペラや協奏曲、交響曲、室内楽、宗教音楽など、あらゆるジャンルにわたって傑作を書き残している。ウィーンでは自らの独奏によるピアノ協奏曲や、「フィガロの結婚」他のオペラで成功を収めて時代の寵児となるも、35歳で早世した。